

「249年を経て蘇るピッチンニ作曲、喜劇オペラ《クーマのエネアス》(ナポリ、1775) 序曲」

公開シンポジウム

# トロイの英雄エネアス

～18世紀後半、イタリアにおける古代への熱狂とオペラ～

熊本大学フィルハーモニーオーケストラ  
第46回 サマーコンサートにおけるピッチンニ作曲  
《クーマのエネアス》序曲世界復活初演を記念して  
(於 熊本県立劇場 2024年6月29日14:00開演)

## ●趣旨説明とイントロダクション

山田高誌(熊本大学大学院人文社会科学部/教育学部音楽科准教授・音楽学)  
「ニコロ・ピッチンニ(1728-1800): マリー=アントワネットから乾隆帝までが聴いた大作曲家」

## ●基調講演

河村英和(跡見学園女子大学教授・建築・美術・観光文化史)  
「エネアスを訪ねるグランドツアーと風景美術」

## ●パネル発表

山田高誌  
「18世紀オペラにおけるトロイの英雄エネアスの描かれ方の系譜と、喜劇オペラ  
《クーマのエネアス》(ナポリ、1775)におけるエネアス。そしてそのナポリ初演の実態。」  
伊藤理恵一岩國美織一村嶋愛海(熊本大学教育学部音楽科4年生グループ)  
「ピッチンニ作曲、喜劇オペラ《クーマのエネアス》(1775) 序曲楽譜校訂作業報告」

入 場／無料  
日 時／2024年6月29日(土) 11:00～13:00  
場 所／熊本県立劇場コンサートホール ホワイエ

料 金／無料 \*シンポジウム参加の方は、14:00からの熊大フィル定期演奏会を無料でお聴きいただけます。  
主 催／熊本大学音楽文化学研究室  
共 催／公益財団法人 熊本県立劇場、熊本大学教育学部、熊本大学フィルハーモニーオーケストラ  
後 援／日本音楽学会、イタリア学会、イタリア会館・福岡、熊本大学大学院社会文化科学教育部  
連絡先／熊本大学音楽文化学研究室(山田) yamada@educ.kumamoto-u.ac.jp



## 公開シンポジウム トロイの英雄エネアス

2023年度、熊本大学の教育学部授業（音楽学）の一環で、ニコロ・ピッチンニ作曲喜劇オペラ《クーマのエネアス》（1775）の序曲部分の楽譜校訂を行いました。その楽譜を用いて、熊本大学フィルハーモニーオーケストラの定期演奏会（熊本県立劇場、6月29日）で、当該作品の序曲の世界復活初演を行います。

本シンポジウムはこれを記念し、18世紀イタリアで最も知られたナポリ楽派の作曲家ニコロ・ピッチンニ（1728-1800）についての理解を深めるとともに、本作品のテーマとなっているトロイの英雄エネアスの描かれ方を、美術史として（跡見学園女子大学教授、河村英和氏）、そしてオペラ史として（熊本大学准教授、山田高誌）二つの講演で辿り、最後に、この楽譜校訂作業を行った学生グループ（熊本大学教育学部音楽科4年生の3人）による校訂報告を行います。

### 発表 河村 英和

#### 趣旨 「エネアスを訪ねるグランドツアーと風景美術」

オペラ《クーマのエネアス》が上演された18世紀は、クーマとその周辺がマストな観光地であった。当時はイギリス貴族を中心とする「グランドツアー」の黄金期で、ナポリに行く主な目的は、ナポリでオペラを鑑賞し、近郊の古代遺跡巡りをすることだった。叙事詩『エネアス』を書いた古代ローマ詩人、ウェルギリウス（紀元前70-19年）のナポリにある墓、その舞台となった冥界の入り口であるアヴェルノ湖やアポロンの神殿は必須のスポットで、ナポリに来てクーマを訪れないことはあり得なかった。そしてこれらの風景は、版画、グアッシュ、油彩の美術作品となり、グランドツウリストたちの恰好の旅土産用となった。本発表では美術史の観点からエネアスの描かれ方に注目してみたい。



### 発表 山田 高誌

#### 趣旨 「18世紀オペラにおけるトロイの英雄エネアスの描かれ方の系譜と、喜劇オペラ《クーマのエネアス》（ナポリ、1775）におけるエネアス。そしてそのナポリ初演の実態。」

ベリ作曲《エウリディーチェ》（1600）以降、音楽劇＝オペラは古代ギリシャの物語を主要な題材としてきた。18世紀になり、オペラは宮廷の「教科書」として、高潔で、寛容な英雄たちは、君主、貴族の見習うべきお手本として描かれるようになる。一方、同時代の庶民、市民の生活を方言とともに描く「喜劇オペラ」は、1760年代より「高踏化」が推し進められ、徐々に宮廷オペラの語法や英雄的人物を取り込んでいく。ピッチンニ作曲喜劇オペラ《クーマのエネアス》（ナポリ、1775）は、まさにこのジャンルの過渡期にあつて、庶民と古代の英雄が交わる「現代劇」として描かれた作品であった。エネアスは教養ある英雄でありながら、ナポリのおっさんを手下に冗談を言い恋人を追い求める。つまり「同時代人」として、人間的な側面がクローズアップされるのである。本発表では、エネアスはじめトロイアの英雄たちがオペラの歴史の中でどのような姿で描かれてきたか、《クーマのエネアス》を起点に眺めていくほか、1775年、この作品が初演されたナポリの民間劇場の上演実態についても、発表者がこれまで行ってきた史料調査をもとにその概要を示したい。



### プロフィール 河村 英和

東京工業大学建工学部築学卒、イタリア国立ナポリ・フェデリコ2世大学建築学部博士課程PhD取得、現在、跡見学園女子大学観光コミュニティ学部教授。建築史・風景美術・観光・ホテル建築文化史を専門とする。主な著書に、『イタリア旅行―「美しい国」の旅人たち』（中公新書）、『カプリ島―地中海観光の文化史』（白水社）、『ナポリ建築王国―「悪魔の棲む天国」をつくった建築家たち』（鹿島出版会）、『Alberghi storici dell' isola di Capri（カプリの歴史的ホテル群）』（Edizioni La Conchiglia）、『Storia degli alberghi napoletani（ナポリの宿屋・ホテル群の歴史）』（CLEAN Edizioni）がある。

### プロフィール 山田 高誌

専門は音楽学、イタリア・オペラ史。兵庫県出身。早稲田大学卒業。大阪大学大学院文化表現論（音楽学）博士後期課程、およびバリー音楽院「ニコロ・ピッチンニ」上級ディプロマ（記譜史）修了。日本学術振興会スーパーポスドク研究員（東京芸術大学）、同会海外特別研究員、大阪大学大学院助教、神戸女学院大学院音楽研究科、東京芸術大学非常勤講師などを経て現在、熊本大学大学院人文社会研究部・音楽文化学講座/教育学部音楽科准教授。18世紀のナポリのオペラ、劇場について楽譜、台本、史料から多角的に調査を行っている。共著に『Da Napoli a Napoli』（Lucca: LIM, 2014）他論文多数。ほか楽譜校訂を通して作品の復活蘇演に取り組み、ボルボラ《アグリッピーナ》（1708）、チマローザ《アテネ建国》（1788）、チマローザ《秘密の結婚―ナポリ稿》（1792）などの楽譜校訂を行いウィーン、東京などで世界復活上演、録音を行うほか、東京都北とびあ音楽祭（ベルゴレージ生誕300年記念、2010）監修、ドメニコ・スカラルラッティ音楽祭（東京、2008）主催。在コルトーナ、Accademia Toscanaによるチマローザ校訂全集編集委員。イタリア学会評議員。